

---

# 雨の日はメトロに乗って

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の日はメトロに乗って

### 【Nコード】

N8347A

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

父はメトロに牽かれて死んだ。その影は今も、僕の中でくすぶり続ける。

実際に見たわけではないのに、僕の脳内ではいつものように、緩やかに半円を描き飛ぶ父の顔がリピートされる。

響く割れるような警告音。青ざめる者、好奇心を剥き出しにした者。誰一人、助けようと思う者なんていなかっただろう。

酔っ払って、落ちたホームレスを助けて、地下鉄の列車にひかれた。英雄ではなく、正義感のある馬鹿なヤツという記事が圧倒的に多く、世論も喜んで話のネタにした。三週間で立つところには、忘れ去られて、本物がどうか怪しい合成写真がWebで流れた。

嘲笑する群衆の目の前で、父の体から流れ出た赤黒い血液が付着した列車は、たったの三日で運行を再開した。

鉄道会社に落ち度はない。繰り返された弁明は、謝罪の言葉ではなく、迷惑をかけておいて賠償金も払わないのかという奇妙な間違い電話の言葉しか聞こえなかった。

世間の風は冷たく、関係のない母や妹にまで非難が繰り返された。

まるで、犯罪者の家族か、犯罪者そのものようだ。

そんな、一時の流行も過ぎて、ああそんなこともあったな、という程度の笑い話として残っている位だ。

雨が降っている。

緩やかな慣性に逆らわず、剥き出しになったコンクリを伝いながら下に、下に。

僕は、スニーカーで水滴を蹴りながら、地下鉄への階段をゆっくり降りる。

朝の早い時間帯では、客もあまり多くはない。

切符を買ったお釣りで自動販売機で缶コーヒーを買って、空いているベンチに座る。

ここは地下。太陽のあたらない陰湿な壁の向こうでは、雨が相変わらず降り続ける。

透明なビニール傘は、汗をかいたように、じつとりと湿っている。

濃密なコーヒーの苦さが狂ったように舌の上を跳ねる。

最後まで、胃の中に流し込んだソレを吐きだしたい衝動を抑えて時計を見た。

二分とちょっと。

気分が悪い。胃の中を醗い足の多い虫が這い回るような不快感。

明るいライトが徐々に近付いてくるのを視界の端で捉えた。

静かにドアが開く。

ドアに入るというよりは、吸い込まれるように地下鉄に乗り込んだ僕は、手近に空いていた座席に座った。

両手に、びっしりと汗をかいていた、額から汗が落ちる。暑いわけじゃないが、気分の悪さは今まで感じた気持悪さなんて比較にならないかった。

地面の底から、白い父の眼がこちらを見ている気がした。

僕は下駄箱の前に立っていた。必死に自分の靴を探すのだけど、どこにもない。

仕方がないので、適当に近くにあった靴を盗った。ノリ子ちゃんのだった。

グレーの女物のスニーカー。

妹から借りたブルーの傘が折れていた。靴跡がわざと無数についていた。

僕の傘は、ずっと前から壊れたまんま、その傘たてに差してある。

無言で妹から借りた傘を持った。

根本からポキッと曲がって、青い残骸ができた。

自転車置き場に、僕の自転車はなく、ゴミ捨て場に、鍵とタイヤのない自転車が捨ててある。

仕方がないので、僕は雨の中を走って帰った。びしょびしょになって、顔も濡れた。

泣いているのかどうかさえ分からない。雨は冷たくて痛い。

やがて、走り疲れてゆっくり歩いた。高架下で休んで前も見ないで全速で走った。

妹にする言い訳は結局、思い付かずに、玄関の前で十分くらい立っていた。

次の日から、僕はメトロに乗って……。

急に意識がはつきり戻った。十二個の眼球がいつせいに僕の方を向いた。

僕は泣いていたらしい。

ほっぺたが少し熱かった。

地下鉄は止まっているのか、前に進んでいるのか、それとも、後ろに進んでいるか。

窓を見ると、さっき乗った駅が後ろ向きに通り過ぎていった。

折り返して、戻ってきたようだ。

降りない。

まだ降りない。

駅の名前がいくつか通り過ぎて、父の死んだ駅についた。

ゆっくりとドアが開閉するが降りる人はいない。まだ、ドアが閉まらない。

僕を呼んでいるみたいに、ドアはまだ閉まらない。

僕は、ホームに降りた。

その瞬間に、ドアが閉まる。

その駅は、大きな市営プールがある駅で、幼い頃は何度か来たこともある。

改札口を出て、階段を上る。相変わらず、雨が地面を叩き付けて軽快なビートを鳴らす。

「なにしてんの？」

怒りを孕んだ声が後ろからする。

振り返る前に、ノリ子だと分かる。逃げなきゃ。

全部で七人くらいの不良の中でも、ノリ子だけは別格だった。

「なんで、この街で息吸ってんのよ？」

何か言おうとしたら、傘で背中を突かれた。

痛い。

階段をかけおりと、追ってきて直ぐに囲まれた。

三年たっても、ノリ子はノリ子だった。

打たれて、殴られて、蹴られて。治っていた痣がうずく。

改札口を通らされ、ホームに出る。後ろは線路で、威圧的な態度で僕を囲む。

「飛びなよ」

有り得ない言葉に僕は驚く。

「飛んで、お父さんのところに逝きなよ。」

周りの不良達は笑っている、冗談だと思っているのだろう。でも、ノリ子の目は笑っていなかった。



「飛べっていつてんだろが!!」

僕の目は、しっかりとノリ子の目を見ていた。

押してみると挑発したわけではない。

押してくれと懇願したわけでもない。

それでも、ノリ子は僕の肩を軽く突いた。

反響するノリ子の声と、騒がしくなるホームの人達。

反転する視界の隅で、父が見えた。

僕は、必死で父の腕を掴んだ。しっかりとした手応えと父の手の感触がある。

「父さん。ごめん。」

背中に衝撃が走る。

ノリ子がヒールをつきたてで、必死にホームに上がろうとしていた。

僕が握ったのはノリ子の細い腕だったのだ。

僕は、立てなかった。骨がいくつか折れているのかもしれない。

「死にたくない」

とパニックになっているノリ子の白い足には、幾つもの手が絡み付いている。

さっきまでノリ子の仲間だった奴らも、誰も助けようとはしない。

彼等には、無数の手は見えていないのだろう。

焦っているノリ子を見て、笑ってさえいる。

電車が来る気配はない、それでもノリ子は必死だ。

ビリビリと空気中を電気が通ったような感覚がする。

無数の白い手が僕を、そしてノリ子を飲み込んでいく。

湿った手のひらは、冷たくもなければ、温かくもない。

ペタペタと体を覆いつくして、ついには顔以外は白い手に埋まってしまった。

「父さん。」

白い手の中で僕は呟いた。

白い手の中に見覚えのあるごつい指が見えた。

僕は他の手を掻き分けて引っ張り出した。温かくて、ちょっと固くて…。

僕はその手を握り締めた。

「その子を助けてホームに上がれ。私はお前を恨んではいないんだよ。だからお前もその子を恨んじゃいけない。」

そう言っているみたいだった。

雨の日、メトロに乗って帰る度に僕は父を裏切っている気がしていた。

でも父は恨んでいるんじゃない。

「私を信じる。お前は助かる。こっちに来てはいけない。」

白い手は急に、力を失って地面に沈む。父の手も握った僕の手と一緒に沈む。

僕は大好きだった父の側にいたいという気持ちと、死にたくないという気持ちの間で揺れていた。

すると父は僕の手を力一杯握った。

その痛みに、僕は手を離してしまう。

「父さん」

僕はもう一度呟く。でも、迷いはなかった。

力が抜けて座り込んでいるノリ子の肩を支える。

気付けば鋭い警告音になっている。

白い閃光が真っ直ぐに近付いている。

僕はノリ子を押し上げるが、

力の入らないノリ子はズルツと落ちそうになる。

減速しかけた列車が、耳障りな音を立てながら僕の体を押し潰す寸前に、足が跳ね上がる。

お気に入りのスニーカーを引きつりながら、駅に列車が停まる。

激しい嘔吐と荒い息でホームに大の字に寝っ転がる。

ノリ子は震えながらも、自分の体が無事なことを確かめて安堵しているようだ。

駅員が、今頃になって慌てて近寄ってきた。

「大丈夫かい？」

「はい、生きています。」

そういつて僕は、騒がしい人の群れの中を、駅のエントランスを突っ切って、雨の止んだ地上に向かった。

僕の傘は、どこまでもメトロに乗っていく。でも、誰も知らない。雨は止んだのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8347a/>

---

雨の日はメトロに乗って

2010年12月23日00時58分発行